

Sir Beves of Hamtoun の翻訳者

酒見紀成

1. 中世ヨーロッパでの人気

Sir Beves は *Richard Coer de Lion* や *Speculum Vitae* や Chaucer の ‘*Sir Topas*’ などで言及されているだけでなく、イタリア語、アイスランド語、ウェールズ語、スラヴ語にも訳されており、中世ヨーロッパでとても人気があったことが分かる。英語版は6つの写本と多くの印刷本に伝えられる。最も古いのは Auchinleck 写本 (c. 1330) のもので、この拙論で取り上げるのはこの写本の *Sir Beves* である。と言うのは、諸写本の系統図を見ると、大きく2つのグループに分かれ、A は他の2つの写本、BL Egerton MS (= Sutherland MS) と Naples MS と共に一方のグループに属するが、しばしばこれらと異なる読みを持っているからである。(もし S と N の読みが、もう一方のグループのそれと一致する時は、A ではなく、S と N の読みがオリジナルと言える。)

また、この詩は主人公が生まれた所、すなわち南部のサウサンプトンの近くで作られたとされるが、Auchinleck 写本自体はロンドンで 1330 年頃に製作されたものである。これと符合するように、最後のエピソードであるロンドン市民とビーヴェスとの闘いにおいて、タワー通り、パトニー、テムズ川、ウェストミンスター、チープサイド、ラドゲート、ボウ、ロンドンストーン、レーデンホールといった多くのロンドンの地名が出て来る。しかも、この部分は翻訳者によって加筆されたところである。

原典はフランス語、正確に言えば、アングロ・ノルマン語の *Beuve de Hanstone* (12th c., 3850 lines, 2 MSS.) である。*Sir Beves* の中にもしばしば、「・・・とフランス語の本に書いてある」という表現が出て来る (ll. 888, 1566, 1782, 3467, 4306)。フランス語の写本は二つあるが、翻訳者はこの二つのフランス語写本のいずれをも目の前に置いていたわけではないと Eugen Kölbing (1885, 1886, 1894) は言う。¹⁾ 以下、他の諸写本との比較は、この校定本の情報に基づく。

2. 翻訳者による加筆

もちろん原典が短くされた個所もあるが (ll. 1300-4, ll. 3265-3270, ll. 3787-3816)、圧倒的に加筆された個所の方が多い。スコットランド国立図書館のホーム・ページにアップ

ロードされているテキストは²⁾ 4620 行 (4444 行+176 行) だから、これからフランス語の 3850 行を引くと、770 行が増えたことになる。しかし、短くされた個所もあるので、実際にはもっと多い。大幅な加筆は、Kölbing によれば、3 箇所ある。箇条書きにすると、

ll. 585-738 : ビーヴェスがエルミン王の部下に挑発され、彼らを殺すところ。彼の愛馬アルンデルが唐突に出て来るので、後の付加かも知れない。「全く余計な話」とも思われな
いが、他のどの版にもない。

ll. 2421-2734 : 竜との闘い。原典にはない。 *Sir Degaré* によく似た描写がある。

ll. 4107-4358 : 国王の悪い執事に唆されたロンドンの住民たちとの闘い。

敷衍・拡張されている個所は数多い。例えば、猪退治の話 (ll. 739-836)、跳ぶマムシとの闘い (ll. 1539-66)、ビーヴェスを巡礼として描写したところ (ll. 2239-72)、ジョシアンによるミール卿殺害の露見 (ll. 3049-88)、ジョシアンが薬草を食べて癩病人を装うところ (ll. 3647-710)、ビーヴェスとイヴォール王との一騎打ち (ll. 3981-4060)、など。

その他、1 行だけの追加を含めると全部で 100 個所以上もある。これらの加筆は物語をより具体的に、よりドラマティックにするのに役立っている。

38 f., 46-48, 56, 61-66, 76-78, 79-84, 113 f., 154-6, 205-10, 218, 242 f., 257 f., 310-12, 363, 365 f., 400-08, 493, 526, 531 f., 548, 550, 575-77, 923, 973 f., 1084 f., 1087, 1140, 1160, 1167, 1191, 1215-8, 1228, 1257 f., 1263-82, 1287, 1310, 1315-20, 1325, 1334-46, 1372-88, 1393-9, 1445-8, 1509-26, 1548, 1571-4, 1581-4, 1593-6, 1595 f., 1661 f., 1734, 1765 f., 1747-78, 1779-82, 1873 f., 1875-80, 1890-98, 1926-32, 1934-6, 1939 f., 1947-58, 1967-72, 1978-80, 1991-2004, 2008 f., 2013-36, 2069-2100, 2185 f., 2227, 2237-50, 2352-4, 2360, 2404, 2735-8, 2751-8, 2805-22, 2833-5, 2851-78, 2883 f., 2894-6, 3181 ff., 3216, 3253-58, 3322-6, 3340, 3343-6, 3377 f., 3393, 3460-2, 3539-44, 3549-54, 3675, 3678-80, 3723, 3841-4, 3851 f., 3854 f., 3885 f., 3901 f., 3939 f., 4063-6, 4081, 4088, 4399 f., 4417 f., 4441 f.

ただ、これらの加筆がすべてフランス語から初めて英語に訳された時に行なわれたとは考えにくい。しかし、いつどの段階で行なわれたのかを言うのは難しい。常識的には、少しずつ物語が膨らんでいったのであろう。それでも、A 写本にしかない話は、この写本の製作時に追加されたと考えてよいだろう。

仏語版と材料の扱いがかなり異なる個所もある。例えば、ビーヴェスとライオンとの闘い (ll. 2421-2501)。そして、小さな違いは数多くある。

1. 973 f. : 盾に描かれた三羽の鷲、英語版のみ。

- 1. 1084 f. : 仏語版ではエルミン王はジョシアンに食事を食べさせるよう命じるだけ。
- 1. 1287 : A のみ、木の名前が *medlar* 「セイヨウカリン」。
(l. 1315-20 : 仏語版でもビーヴェスはテリィに、ビーヴェスと呼ばれる子供が吊るされるのを見たと答えるが、他の英語版の写本では、ビーヴェスと一緒に帰ると答える)
- 1. 1747-78 : 仏語版では、ビーヴェスの対戦相手は **Grander** ではなく **Bradmond**
- 1. 2735-8 : 「ワイト島」の名前は仏語版にはない。
- 1. 2781-804 : 仏語版では、皇帝は使者ではなく、ビーヴェス本人と会う。
- 1. 2885 f. : 仏語版では、ビーヴェスは **Karfu** という騎士に頼むが、英語版では、誰か皇帝の所へ行ってくれる者はいないかと問う。
- 1. 2963 f. : 仏語版では、ここには手紙は出てこない。
- 1. 3549-54 : 仏語版では、森林官はビーヴェスの双子を育てる。
- 1. 3723 : 仏語版では「ギリシア」ではなく **Abreford**
- 1. 4386 : 仏語版には「ノッティンガム」への言及はない。

さらに、うっかりミスもある。

- 1. 1108 : *Ichauede þe leuer to me lemman | þe bodi in þe scherte naked |*
þan al þe gold þat crist hap maked,
異教徒のジョシアンがキリストを引き合いに出している。

このように、この詩は翻訳と言うより、翻案である。そしてこれはオーヒンレック写本所収のほとんどのロマンス（武勲詩）に当てはまることも知れない。

3. エンターテナーとしての翻訳者

中世に作られた武勲詩は、この詩の冒頭に「皆様、私の話をお聞きください。サヨナキドリより陽気に、私がこれから歌いましょう」³⁾とあるように、もともと吟遊詩人たちによって聴衆の前で語られたのであろう。⁴⁾ 日本でも筆者が小学生の頃まで、村の秋祭りなどで、夜に映画や浪花節の興行が催されていた。面白いのは、この詩の女主人公のジョシアンが「吟遊楽人の芸を学んで」おり、ヴァイオリンで、「ダンス曲や華やかな装飾的楽節など、いろいろな曲を演奏」することができたことである。この技能で彼女は、異国のギリシアで病気にかかったサベール (Saber) を半年間養ったとある (ll. 3729-42)。

翻訳者＝詩人は、サービス精神旺盛なエンターテイナーだった。キリスト教徒の騎士たちが異教徒のサラセン人と戦って勝利したという話だけでは聴衆が満足しなくなっていたのだろう。いつもキリスト教の戦士が勝つことになっているからである。⁵⁾ それにしても、*Sir Beves* には様々なエピソードが過剰と思えるくらい盛りだくさんである。猪退治、ライオンとの闘い、毒蛇との闘い、竜退治、馬上槍試合、競馬、一騎打ち、王や部下の裏切り、

偽りの手紙、魔法の指輪、様々な夢とその解釈、結婚式、双子の出産、馬泥棒、等々である。戦闘の場面が多いにも拘わらず、読んでいて、思わず笑ってしまう個所がある。そのような皮肉やジョークやユーモアをもつ個所を列挙しよう。

1. 418-20 : His heued he gan al to cleue | And forþ a wente wiþ þat leue |
Into þe halle 「彼の頭を叩き割って、許可をもらうと、広間の中へどんどん歩いて行きました」

論理的には「許可をもらわずに」とすべきところであろう。

1. 879-81 : He þou3te make pes doun ri3tes | Of þe forsters ase of þe knites |
To hem faste he gan ride 「そこで彼は騎士たちにしたように、猟場管理者たちともすぐに和睦しようと思ひ、彼らの方へ馬を疾駆させました」
「和睦する」はここでは「殺す」ことである。

1. 1869-74 : ‘Grander’ queþ Beues ‘y 3af hod | And made him a kroune brod; |
þo he was next vnder me fest, | Wel y wot, ich made him prest, |
And hi3 dekne ich wile make þe | Er ich euer fro þe te.’
「私は頭巾をやり、彼の頭髪を広く刈り込んでやった。彼が最後に私の手にかかった時、確かに、私は彼を聖職者にしてやった。だからここから立ち去る前に、お前も高位の助祭にしてやろう」

「聖職者にする」も「殺す」と同義である。*Otuel*にも同じような個所がある。⁶⁾

1. 3075-6 : Ichauē so tyled him for þat sore. | Schel hit neuer eft ake more,
「彼の頭痛の処置をしてやった」とは「彼を殺した」の意味。

1. 4313-14 : And made of hem so clene werk | þat þai neuer spek wiþ prest no clerk;
「司祭や学僧と話すことを不可能にした」も「殺した」の意味。

この詩には当時の生活習慣があちこちに顔を出す。いくつか取り上げてみる。中には聴衆がにやりと笑ったであろうものもある。

使者へのプレゼント

1. 151-3 And for þow woldes hire erande bede | An hors icharged wiþ golde rede
| Ich schel þe 3eue, 「お前は彼女の使いとして来たのだから 赤みがかった金を積んだ馬を一頭 お前に与えよう」

ここはアルメニア王からビーヴェスの母の伝令へのプレゼント。他にも、ビーヴェスがジョシアン⁷⁾の使者に豪華なマントを与える個所がある。

1. 1155-7 Ac for þow bringest fro hire mesage, | I schel þe 3eue to þe wage
A mantel whit so melk;

巡礼の扮装

ll. 1295-6 þe palmer nas nouȝt wiþouten store | Inouȝ a leide him before

この巡礼はサベールの息子テリィのことで、父親から命じられてビーヴェスを捜して回った時、この格好をしていた。また、ビーヴェスもブラドモンド王の牢屋から脱獄した後、巡礼に扮した。また、癩病人を装うこともある。ジョシアンは政略的に結婚させられたイヴォール王を遠ざけるため、特別な薬草を食べて故意に顔を醜くする (ff. 3495-3532)。

出産と男性

ll. 3453-5 God forbede for is pite | þat no wimman is priuite |

To noman þourȝ me be kouþe 「神様がその愛情から禁じておられます、
女性の秘密が私のために誰かに知られる ようなことがあってはならないと」

ジョシアンはこう言ってビーヴェスとテリィを遠ざけ、森の中の急拵えの小屋で一人で双子を出産する。

処刑の際の服装

ll. 3113-4 In hire smok ȝhe stod naked | þar þe fur was imaked 「火が熾された
所に、彼女は肌着だけの姿で立っていました」

強引に結婚させられたミール伯爵を寝室で殺したため、ジョシアンは火刑に処せられそうになる。その時の格好である。また、ビーヴェスから処女であることを疑われたジョシアンは「もし私が処女だと認められなければ、私をシュミーズだけの裸同然の姿で 私の敵どもの所へ送り返してください」 (ff. 2204-6) と言う。

夜の生活と視力の低下

ll. 2929-32 þow gropedest þe wif aniȝt to lowe | þow miȝt nouȝt sen ariȝt to
þrowe | þow hauest so swonke on hire to niȝt | þow hauest neȝ forlore þe
siȝt 「お前が夜ごと奥さんの体を下まで愛撫したせいだ。 だから、物を投げようにもちゃんと見えないのだ。 夜、彼女のためにがんばり過ぎて、 視力が衰えた見える」

これはビーヴェスの母と結婚したアルメニアの皇帝が、自分を騙したビーヴェスの使者を殺そうとして食卓のナイフを投げるが、誤って自分の息子に当たった時の使者のコメントである。

Sir Beves にはことわざも散見される。聴衆の知っていることわざを使えば、聴衆はいつでも容易に得心がいったことであろう。

l. 548 Wikked beþ fele wimmen to fonde.

「探せば、悪い女はたくさんいます」 これはビーヴェスの父ガイ卿を裏切ったガイ卿の妻、つまりビーヴェスの母に関して使われる。

1. 1191-2 Men saip̃zhe seide in olde riote | Pat wimmannes bolt is sone schote
 「女の矢はすぐ放たれる」 これはビーヴェスにふられたジョシアンが彼を侮辱した後、反省して彼に謝罪するところでジョシアン自身が使う。
1. 1217-18 Deliuere a pef fro þe galwe, | He þe hateþ after be alle halwe.
 「盗人は恩を仇で返す」 これはビーヴェスが助けてやり、自分の家令にしてやった騎士がビーヴェスを裏切るところに出て来る。
1. 3176 Mani hondes makeþ liȝt werk
 「多くの手は仕事を軽くする」 ビーヴェスの母と結婚したアルメニアの皇帝が巨人のアスコパルド（ビーヴェスの小姓）を多勢でもって倒そうと言う時に使う。
1. 3419 For whan a man is in pouerte falle | He haþ fewe frendes wiþ alle
 「人は貧乏になると、友人がいなくなる」 ビーヴェスに忠誠を誓ったアスコパルドも、貧乏になって彼を裏切り、もとの主人に寝返る。そして、森の中で出産したばかりのジョシアンをさらう。

4. *Sir Beves* の写字生

この詩を書写したのは Auchinleck 写本に関係した 6 名の写字生のうち Scribe 5 であり、*A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English (LALME)* によれば、Essex の出身とされる。この詩の言語上の特徴をいくつか列挙しよう。

loss of <i>h</i>	is = his
inf. in <i>-i</i>	wardi; pasi; これは南部の形態
noun + <i>his</i> for gen.	wiþ þe bor <i>his</i> heued; Wiþ deþ <i>is</i> dentes
enclitic <i>a</i> for 'he'	Beues <i>a</i> hiȝte of hamtoun. など多数
<i>me</i> instead of <i>mi</i>	me tale; Me lord; me bour など多数
pr. p. in <i>-ande</i>	wakande; grennand; rampand

とりわけ *he* の代わりに *a* は珍しい。これは *Kentish Sermons* にも現れ、⁷⁾ そこでは 'he' はふつう *ha* であり、その *h-* が落ちたのであろう。*Sir Beves* の *a* は詩人が使ったのだろうか、それとも写字生が持ち込んだものだろうか。念のために *LALME* (Vol. 1 dot map 1127; Vol. 4, 313) を調べてみると、意外にも、*ha* は 6 つの写本にしか現れないのに、*a* は 37 もの写本に現れ、しかも南部の西から東までの 15 の州に点在していることが分かる。⁸⁾ その中にロンドンやサウサンプトンは無いが、写字生の出身地とされる Essex は 5 つの写本が数えられる。だとすると、Scribe 5 が転写用写本 (exemplar) にあった *he* を *a* に代えた可能性が高い。この写字生は Auchinleck 写本で彼が写したもう一つの作品 *Reinbrun, Gij sone of Warwicke* でも、*a* 'he' や *is* 'his' を使っている。⁹⁾

詩人の実像が掴みにくいのは、中世の詩が口承や写本によって伝承されているので、詩人の前に写字生の壁が立ちはだかるからである。Kölbing の *stemma* によると、この作品は、 $z \rightarrow x \rightarrow A$ と、少なくとも二度の転写を経ている。ということは、理論上、A 写本の *Sir Beves* には三つの言語の層が存在することになる。全部書きかえれば、写字生の層のみであるが、脚韻などはふつう変えないので、最低でも二つの層は存在する。

5. *Sir Beves* の翻訳者、そして結論

先に見たように、これほど多くの加筆を行なった翻訳者は詩人と呼ばれて然るべきだろう。彼はロンドンの地理にとっても詳しいので、ロンドンかその近くに住んでいたと思われる。10) ここで思い出すのは W. Heuser の説で、彼は *Kyng Alisaunder* グループの作品、すなわち *Kyng Alisaunder; Of Arthour and of Merlin, Richard Coer de Lion* それに *The Seven Sages of Rome* (?) の作者は、ロンドンを中心とする同じ地域に住んでいた血縁関係にある同時代の詩人たちの集団であると言う。11) *Sir Beves* の翻訳者・詩人もその一人であろうか? AM の校訂本を著した O. D. Macrae-Gibson (1979: 73) は、「剽窃」の概念が無かった時代において、同一の詩人の作か、同じ 'school' の詩人たちの作かを区別するのは不可能だろうと言う。12) また、G. V. Smithers は、KA の詩人は聖職者ではなかったかと言っている。13)

もう一つの説は *The King of Tars* の校訂本 (1980) を出版した Judith Perryman の "a London / east-midland romance *koine*" が存在し、KT はこの「方言」で書かれているというもの。確かに、同じ脚韻や表現が他の武勲詩にもよく現れる。例えば、現在分詞の *-ande* は元来、北部方言に属するが、この「ロマンス共通語」に入っているので、ロンドンの詩人や写字生たちも使ったのである。14) 仮に複数の作者が異なる方言の話し手であったとしても、その「共通語」を使えば、同一の作者が書いたように見えるかも知れない。

まだ仮説の域を出ないが、筆者の印象は、オーヒンレック写本に収められているこれらの作品群は、この写本製作のために新たに書き直されたのではないか、というものである。この写本に入っている作品は独自の読みを持っているからである。*Otuel a Knight* の場合も、他の二つの写本 (MS Fillingham と MS Thornton) ではオジュールが、捕らえた敵将のクラレルを釈放しようと言うのに、A 写本では殺そうと言っている。15) もっと重要なことは、*Roland and Vernagu* の最後のスタンザが、すぐ後の作品 *Otuel* へのリンクとなるように書き直されていることである。*Sir Beves* は、最初の 474 行は 6 行の stanza で、残りは couplet になっている。これも A 写本製作時に、すぐ前に収められている *Reinbrun* と同様、16) この詩を stanza 形式に変えようとしていたのかも知れない。David Burnley 教授によれば、この写本の 44 の作品中、実に約半数が 'unique copies' なのである。17)

注

- 1) Kölbing, Eugen, ed., *The Romance of Sir Beves of Hamtoun*, EETS ES 46, 48, 65, 1885, 1886, 1894, repr. 1978, p. xxxv.
- 2) The National Library of Scotland の HP にはオーヒンレック写本所収の 44 のテキストすべてと、同写本のすべてのページがカラー写真で見ることができる。これは Sheffield 大学の David Burnley 教授 (2001 年 8 月 5 日に急逝) と助手の Dr. Alison Wiggins と同国立図書館の Dr. Kenneth Gibson たちによって計画・遂行された The Auchinleck Manuscript Project の成果である。(筆者もシェフィールドに滞在中、少しだけお手伝いした。)
- 3) *Sir Beves* の試訳は筆者のホーム・ページ ([//www.eleph.it-hiroshima.ac.jp/sakemi/](http://www.eleph.it-hiroshima.ac.jp/sakemi/)) にある。ここには *Reinburun* と *Roland and Vernagu* と *Otuel* の試訳もある。
- 4) D. S. Brewer (*English Gothic Literature*: 84) は、オーヒンレック写本に収められているようなロマンスは、吟遊楽人 (minstrel) によってではなく、学問のある人たちによって書かれたものであり、その際、彼らは口頭の話ぶり (oral delivery) を模倣している、と言う。しかし、模倣しただけであろうか? l. 1458 に見える *3em me* 'give me' などは話し言葉の反映と思われるが、これも模倣であろうか?
- 5) キリスト教の戦士が敗北する例は *Chanson de Roland* にある。しかし、Auchinleck 写本の *Roland and Vernagu* と *Otuel a Knight* にはローランが死ぬところは訳されていない。この写本の製作を依頼した人が聞きたくないだろうと訳者・詩人が付度したからかも知れない。ただし、Fillingham 写本の *Otuel and Roland* には、ローランが死に、シャルル (=カール) 王が深く悲しむところが描かれている。(ll. 2373-2672)
- 6) *Otuel*, l. 183-6: Mahoun mi god ich here forsake / 3ef he sschal euere ordres take / Of ani oper bisschopes hond / Bot of Corsouze mi gode brond 「どこかの司教の手によってではなく 私の名刀コルスーズによって 頭髪を剃ってもらおうとする者がいたなら」
- 7) Bennet, J. A. W. and Smithers, G. V., ed., *Early Middle English Verse and Prose*, 1968, pp. 221-2.
- 8) *a* が現れる写本は Brk 2, Bck 1, Dvn 4, Ex 5, Gl 7, Hrf 1, Kt 2, (Nfk 2), Ox 1, Sal 1, Som 5, Sur 1, Sx 2, Wlt 3, Wor 1, *ha* は Brk 1, Kt 4, Sx 1 という内訳である。
- 9) Scribe 5 の特徴的な綴りを挙げておこう: a3en 'again(st)', boute 'but', meche(l) 'much', ferst 'first', 3he 'she', 3if 'if', hertte 'heart', schel 'shall', þei / þe3 'though', werche 'work' など。
- 10) J. Smith (1996: 69) によれば、この写本はエドワード三世の宮廷と関係があるだろう。だとすると、チョーサーはオーヒンレック写本を読んでいたという説もうなずける。ただ、気になるのには、*Sir Beves* においてエドガー王もその王子もあまり好意的に描かれ

ていないことである。王子はビーヴェスの愛馬アルンデルを盗もうとして、馬に脳天を蹴られて死ぬ。エドガー王はそれを悲しみ、ビーヴェスを絞首刑にしようとするが、家臣たちに反対されるという具合である。それほどこの伝説的な英雄は愛されていたということであろうか。

- 11) Liedholm, Astri, *A Phonological Study of the Middle English Romance of Arthour and Merlin*, 1941, p. xxi.
- 12) Macrae-Gibson (1979: 75) は AM と KA と SS の三つを同じ authorship とするが、RCL は恐らく違うだろうと言う。
- 13) Smithers, G. V., ed. *Kyng Alisaunder*, Vol. II, 1957, p. 60. また Bennet and Smithers (op. cit.: 277) は、KA には難解な OF の語がたくさんあるので、作者はバイリンガルではなかったかとも言う。
- 14) Liedholm (1941: 181-2) は主に *-ande* に基づいて、「*Arthour and Merlin* は北部出身の写字生によって書き写されたロンドンのテキストである」と提案したが、*LALME* は AM を書写した Scribe 1 を London / Middlesex border の人としている。
- 15) Herrtage, J. H., *Otuel a knight*, EETS ES 39, 1882, p. 90 (l. 850).
- 16) Scribe 5 が筆写した二つの作品 *Sir Beves* と *Reinbrun* とはよく似ている。父親の名前は両方とも Guy (Gij)、そして二人とも遠い異教の地へ連れて行かれ（ビーヴェスは母親の命令で外国の船に売られ、レインブルーンは貿易商人に攫われて）、そこで成長し立派な騎士になる。また二人には忠実な教育係りが、ビーヴェスにはサベールが、レインブルーンにはヘラルドがいる。そして前者の息子テリィと後者の息子ハスラックもそれぞれの主人に尽くす（この二人が異国で父親と再会する場面も感動的）。
- 17) 内訳は items 3, 4, 5, 9, 12, 13, 14, 15, 20, 23, 24, 26 (最後の 6774 行), 30, 31, 32, 36, 37, 39, 41, 42 であり、item 6 と item 16 は 'unique versions' である。